



賢女
全傳

千代物語

~ 13
3037
6



門 八 13
號 3037
卷 6

千代

物語後編叙

楚璞

致光必須錯礪

蜀錦摘彩尤資濯江

戴淵變志登將軍位

周處改心得忠孝名

然則玉緣琢磨成昭
車器人待切磋致穿
犀戈未有不學而能
覺乖教以自通夏殷
傾滅周漢興隆並是

子三石四一

前覆火龜鏡後誠之
美風可不戒哉可不
慎哉
丁亥孟春

鼻山人誌







笹川鞆負



伊與平

左京妻
十代

三三三

千代物語後編目録

- 十一 大内家滅亡の事 附 孔雀尾のびきの事
 - 十二 芥川隆保愛後を歌く事 附 二條中將教水の方の事
 - 十三 千代女貞操を字く事 附 大高九京かま事
 - 十四 千代女九京不対面の事 附 伊与平まね忍怖の事
 - 十五 釜川家興の事 附 八尾平藤かまの事
 - 十六 釜川頼員大高九京後氣の事 附 家之儀起の事
 - 十七 桂免入道書写山をむる事 附 阿呼房の事
 - 十八 宗覺源徳の返報する事 附 常駐天房の事
 - 十九 西義士中懐をまて目出度本心へ返る事
- 前後合本十また通計十九章

千代物語後編卷の一

目録

- 大内家滅亡の事 附 孔雀尾のびきの事
- 芥川隆保度位を歌く事 附 二條中將教水の方の事

きつねまの申すのいへ
 飛田江戸の初めとまきす

東里山人



ちよみのごうろく
 千代物語後編卷之一

東都 鼻山人編著

(十一)

あわらちけりや
 大門家滅亡の事
 けりくあやぐを
 孔雀尾のびとの事

日ハ知く夕暮ふ没一月ハ満て又夕影況や人倫
 小おのくおや益んあるものハなびき衰へ先あるもの
 ハ終不消ぬるうれ妻のあらぬ者不周防の由也
 陶尾張也時賢おのれが武威を恃ふ相下郎

重政内黨丹下貞盛とんを合せ嵯我を
江守長保を付比さん姉ふりよせとふ意ふ山に
の至形一押寄くく我降終不防戦の方攻
て高國法泉寺入没落あ一まめて藩代相傳の
家入多く付記ゆてくれバトまづ九列へ後らん
長門の五丈津郡深川大寧寺ままで落ゆるが
終不天文二十年九月朔日ばあふおのく長男貞
平義高を始り冷泉判宜降豊大西源岐守

千三百一十一

隆道岡玉左衛門尉隆秀を法とも不白害く
又あひく六琳聖太子御末子年の家名只一時不滅
亡あ一丸バ尾張守晴賢もとすく不吾我送の罷成
悼中あ一後玉大友左衛門督義久の舎弟義長を向
大内の家督とくそのあ入道して法名を全善とをゆ
る焉不麓別吉田の大將百里九馬女慶任地あ
二男新庄の大將菱川駿河守慶英同く三男小牧川
監物慶秋永足守相討く教代睦びく大内家の



千石
二

國勢を教せんとの勢が合ふ子余續めて全妻
銜先を奪ひしが全妻が大逆を天道もあつて
あつて弘治元年九月初旬岩屋不取り永良も
小陣を五軍の評定して同十月朔日二万余の兵
あつて敵討ちお討つ本陣を搦の岡とりお討ち
居るお討ち二家あつてお玉侍僅り三子余續めて
お向ひ押あしが一戦お利を失ふお討ちお討ち
か浦まで自害し果しつてお討ちの首どもを廿日市の

正吉居二

百りお討ちせし
百りお討ちせし
百里兼川お討ちの威風お討ちあつてお討ちのあつて
陶が討ちお討ち法大將お討ち縁を奪ひてお討ち
人とありお討ちお討ちを継お討ちつてお討ち桂鬼お討ちお討ち
我威お討ちお討ち人を人ともお討ちお討ち法大將お討ちお討ち
てお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ち
お討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ち
お討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ちお討ち

隆の後の老あればとらうとのまきと押のしりすが我
 隆は法泉ちふ楢を竜う勢ひ脱ふかうよトス
 うが隆保進とせと某の将一のる防戦はらん
 静くふは自害ゆといひ捨く山門の前まで付く
 中が急不鑑物の具脱捨く義烈のちを治
 新るとの頃棟を屋より公卿待ま山口の急然
 托げあせし中ふ二條中将良きつる急然とも
 長剣と治めひふおのちの道あて散く破れく

子三右一四

とあまの只一人泣く東をばして伶僂多ひ一ふ
 二條との秘義しあひ多孔雀尾といつる名物の
 琵琶一面定家卿自草の作勢物語一筋是ま
 での身を起しす持多ひいづゆつらあく隆保あいで
 合まふあまより都のちもふ育ちる金園のまゝお人と
 ありあふが髪容娼始光りかぢくをうりえくれを
 隆保屋を竟のちあれと押のひをあてあはる
 上三湯入山口の落人と見えまじつ道の程形もあまの

故の軍勢満くしてひが娘は若の身ゆゑを幸う
 たりあくるは清くもふきど某へ至形あて上をが
 又知りやたら傳る由行快をえ捨せらんぬか意な
 らず安養の国まで送りまひせりんとていづかおの
 方の妻あゆむし〜くやろるま清くあいらぬの境もあふ
 と宣まふべしらぶもの由安あてんけさ然とてものえ
 束あ〜某〜よ某針らひまのいせんとあ〜つもの
 在家より善と美とを持来りふのまの上原の

今右一ノ五

小袖統の袴を脱せまのりせ後の女の姿お振ら
 せぬく包あへる器籠と作勢物清くて我肩と
 ち荷ぎ山崎の谷清ひ〜とその夜にお専〜紀農
 夫の家お宿りたる降係は〜ト押のひろくへ我も
 と清人のあまうは上清我お清がふ〜ともの形まへ又
 い〜せんせられよりの只お捨くは二品の宝物を奪ひ
 去都方お持りたるが莫大の比分あ〜〜今我
 は二品を渡〜とて立退んぬ然とと押のひ後文

赤川孝節
 大内の什器を
 奪ひ去る



赤川孝節

洞雲寺ふ収りて懸懐ふ帛ひたり 躬と廣住
 父子の十月十日まで洋敷して翌二十日小澤とつるふ
 まで返陣しつるは一戦の初り 建部永を弟の香川
 光景のふふ属し 義列の味方ふ就き糸とく
 巖橋之押渡り 陶が侍士大將防列 岩國龜尾
 の城を弘中と河ちが家へ入江と危境つといふ又別
 の兵士の首をとる翌日の入戦めの甲首と二の首
 討たしつるは時始りて百里廣住の鎧甲しめ

おそれ熟切の賞とて新和子名を賜り大高
左京と改名とて吉田の城を海に渡るされが吉田に
おきてある繩のほどなる桂鬼雷右衛門は昨日まで
企て安が子小屠威劣お終りたるが巖島合
戦の糸の退口小雑滅の獲小月毛の馬の去りなく
まゝおあさふり四半の指揚げありて後業多るが
企美すぞ不付しと笑てなちまらふ勢りしと
ものもなぬす一陣を迹去り味方の船おあ業

人定りて伴の二おをよおし審り小逆出んトまる
おの方おの中方おは中將どのおのく人を業が
おびて業お中らおおせしうが是をうて驚きし
推りおひしを振切と狂出すをおの方お徒足りて
おの道何はし逆まへまおおちれからと逆取たまの
隆保ハ人もおおしおおとあるお逆取し
おの方お雖も知らぬくらお夜お業おのさるべお
今宵のさる小隆保が神おなまらうておちめらぬが

隆保ハ二把をあるの古井の中へ入金持の
 方へ逆つらる水の方ハ監人あり人あるまら合
 ト叫びながら跪つ膝びつ追めを隆保入いで合
 るが勇く敵大らゆと押のひらねが水の方をば方
 をふふから付て口をふて拭を押し声を立てるぬ
 中へ一と二把を井の中より安く取出し夜ふ
 紛まり安芸國人と流りたるは隆保ハ兄の家
 智を繞り我隆保事たる希編の芥川と浪を

436下八

ぶらういん

芥川隆保廣住を歌く
 二條中将敏水の方のり

隆保ハ二把をあるの古井の中へ入金持の
 方へ逆つらる水の方ハ監人あり人あるまら合
 ト叫びながら跪つ膝びつ追めを隆保入いで合
 るが勇く敵大らゆと押のひらねが水の方をば方
 をふふから付て口をふて拭を押し声を立てるぬ
 中へ一と二把を井の中より安く取出し夜ふ
 紛まり安芸國人と流りたるは隆保ハ兄の家
 智を繞り我隆保事たる希編の芥川と浪を

大内ちちのの名畧なまかあり我身わがみ小流こりゅうが火ひありあも入いて後のち小妻こつま
 傳つたはじ汝あんがはけ二に罪つみを五ご持もちは揚あを落おちて百ひゃく里りぶの
 まのせよ巫やまひ形かたちとも小こ付つけ死しおせんより莫なたの功いさありん
 款くわんの近ちか付つけぬる小こ疾やくくとのあひうバカちから持もちおび
 相あ見みの君きみの比ひ身みの罪つみをもえ布ふひきむる持もちおの場ばを
 立た出だ是こゝまで持もち来きりゆト殺ころ実まことくちり小こ中ちゆう速すみくれを
 かくどの名な物ぶつを乱みだすの中なか小こ立た出だしゆせいの古ふる今いまの
 忠ちゆう節せつありと度ひらは感かん賞しょうありと尚なほ生なま不ふ録ろく二に百ひゃく石いし

千三后一丸

湯たぬりて外とぎぬ小こさる垂あれくる隆たか保たも通とほるほじ丸まる今いま
 茂の通とほれ割ありし押おのひ然かあきあはし何なに様さまあるも
 あくさる請こころキを疾やくくろく期きて二に條じょうぶのわの方かたは
 降くだりぬるあられ今いまの只ただ玉たまの結むすも絶とぬをさるる
 めいさひくる小こ疾やく明あて里さと人のつて付つけくあゐる痛いたみ
 残のこりぬる方かたありと結むすみの繩あひ解とく押おのま
 家いへ小こ疾やくありまひせしれづおの方かたは只ただ玉たまのふり
 何なにとあへる方かたもまゝまゝに里さと人のあゐる者ものあて

能ふいづの女を思ふせて垂たるが大内家脱小長
列を滅亡し二條殿も我降福めるとも深川
大寧ちめて果のひねとせられが水の方へ只決小
掃きとく今い妻不御主ありいある瀬川あも沈をや
のひくるをまの男さぬぐ小保りまのせせの
おの目か知るの傍ありるを信じておの方の御筆の
警をねりし書書の衣小柄を智長手先立たるひ
たる人への菩提を吊りの外他るひあるりりり

千三后一ノ十



る小慶任父子脱小中國を平拍して妻の中中
静う小ぬれればけるを又出さるひ吉田の越へ
まのせ侍女あどせられく小付して悲情ふかじはき
あつバ尼山若のいふは妻の中安くありぬ後の妻の
等ありとて麒麟釋土飲求津去の勤行あり
他るひあくせおのりる或と死慶任の錯入のひるふ
慶任曲室の内小岡屋して月の夜面白きふん
沈し琵琶を弾くが事あり慶任ハ武勇い

浄保を呼ぶと尼は茶ふ見茶ふせむくが浄
保ハ一目なるなりならまぢ新色土氣いろとぬ
あこましくと農ひ居るふ尼は茶ふいろふあんちヨ
吾後を歌き割き入ら見目をえせく希代の名畧
城守のあこましくのりはあれらうとのまが浄保ハ
只それるあこましくあり今ハ佛の由波ふとくま
あせが會を救ひまると伏勢をこれが尼は茶ふ
復ハ向ひは男報たるとも吾ま再ハはまあも

五三十一

甦きのみま二品の宝恙があく殿のゆふ
入るる浄保ふ怒るは今ハ命令を助け法作
ともましくとあせく二條殿の昔提のたひともあ
これに尼ふめんとして涙あが命を助けあつれしとや
されこれが浄保の形も角も尼は茶ふのとふよあ
ふくと年しあふ不義列の若侍士とも是を
係る徳高直極の若を助けあつれ我あが此の
勵をまするんと一日ハ浄保が法泉ちあめ

三君の才ののを^{あつ}た^まら^しめ^らる^るも^と事^{ごと}ふ^ふも^も其^この^こて^て也^{なり}
 のを^あら^らし^める^るも^も其^この^こて^て也^{なり}
 けり^{なり}さ^らぬ^ぬ方^{かた}大^{おほ}実^{まこと}の^{かぜ}風^{かぜ}を^{やぶ}破^{やぶ}つ^るも^も其^この^こて^て也^{なり}
 を^あら^らし^める^るも^も其^この^こて^て也^{なり}
 武^ぶの^の死^しを^あら^らし^める^るも^も其^この^こて^て也^{なり}
 あり^{なり}也^{なり}

千代物語後編卷之一終



千代一巻

